外国人材

1ヵ国・多数で受入を

支援体制構築など効率的

医療法人桜希会

大阪府内で2病院・3老健を運営する医療法人桜希会（大阪市）は、5月11日よりミャンマーからの介護技能実習生11人を受入れる。受入れに際し法人で取組んだことなどについて、介護事業統括・人事部長でもある谷口卓史理事にインタビューした。

谷口卓史理事

11人中10人がN3レベルに

――法人について教えて下さい。

谷口　1981年開院の東朋病院のほか大阪府八尾市で病院を運営しています。2005年に大阪府豊中市に老健「東雄苑」を開設、翌年には大阪市内と豊中市に老健を開設しています。病院ベッド数は194、老健の総定員は292（短期入所含む）。職員数は約600人です。

――外国人材の活用実績は。

谷口　今回が初めてです。来年春には新たに7人のミャンマー人技能実習生を受入れる予定です。最終的には24名を受入れたいと思っています。

他法人と協力も

――なぜ、ミャンマーなのでしょうか。

谷口　技能実習生の受入れを検討したのは17年からですが、その時点でベトナムやインドネシア、中国には多くの介護事業者が注目しており、人材確保は困難と考えました。ミャンマーは、当時はそれほど注目されておらず、先行者メリットが出るとの判断です。

17年に現地視察に行き、性格や生活習慣などの面で日本との親和性が高いと判断し、この年のうちに内定を出しました。

――その後の教育については。

谷口　現地で日本語や介護に関する教育を行いました。ミャンマー側の問題で、実際の送出しが遅くなった分、現地教育に時間をかけられたのは好都合でした。4月8日に来日しましたが、11人中10人が日本語能力N3を有しています。現在、監理団体の研修施設で研修中で、今月11日より大阪市内の老健で勤務します。

▲来日したミャンマー人実習生たち

業務マニュアル 現地語に翻訳

――受入れに際し、法人で取組んだことは。

谷口　実習生が不安なく働ける環境をいかに整えるかに気を配りました。例えば、給与は初年度は月20万500円で賞与は4ヵ月分ですが、これは日本人職員と同じです。その後の昇給なども全く同じ条件です。

また、実際に生活・仕事をする大阪の街を理解できるように、大阪の観光名所、名物、休日の過ごし方などをイラストや写真で紹介する冊子を作成し、現地での教育の際に活用しました。通勤方法なども解説しています。

――日本人職員への教育などは。

谷口　17年より3老健合同の定例ミーティングを月に2回行い、受入れ体制を整えてきました。業務マニュアルは全て漢字にルビを振ったり、ミャンマー語に翻訳したりしました。また職員向けにミャンマーの文化や風習などを紹介する「ミャンマー通信」を発行したりしました。

――実際に、受入れ準備を進めてみて、気づいた点などは。

谷口　「受入れは1ヵ国に限定すべき」という点です。国が違えば文化も生活習慣も異なりますし、法人でとるべき対応も異なります。複数国から人材を受入れると、支援体制が不十分になってしまう危険性があります。

次に「なるべく多くの人数を受入れる」という点です。少人数では、シフトの関係で休日に一人になることがあります。日本の生活に慣れないうちは1人では不安でしょうし、ホームシックになる可能性もあります。

――今後については。

谷口　今後は、ほかの法人でも外国人を受入れる動きは活発になるでしょう。しかし規模の問題などから、外国人への支援を十分に行えない法人に何らかの協力ができないかと考えています。例えば、外国人職員向けの日本語勉強会を今後行いますが、そこには、他法人のミャンマー人職員も参加できるようにしていく考えです。ミャンマー人向けマニュアルも要望があれば開示を検討します。